

ブルーノ・タウトの業績と 旧宅の保存事業

お茶の水女子大学
名誉教授

田中 辰明



写真1 ベルリン市オンケルトムズヒュッテの集合住宅。ブルーノ・タウト 1927 年設計。



写真2 オンケルトムズヒュッテの団地(ジードルング)に作られたブルーノ・タウトの顕彰碑。「建築は調和の芸術である」とタウトの言葉が記されている。

ブルーノタウトとは

ブルーノ・タウトという名前は知っているが、どうい
う人であったかご存じない方も多い。ドイツ出身の氏は当
初印象派の建築家として、第一次世界大戦後には困窮す
る労働者に多くの団地を供給した社会主義建築家として
知られた。わが国では、著書の中で日本文化を絶賛し、世
界に知らしめた文筆家としての業績も知られるところだ
である。以下に氏の紹介を行いたい。

ブルーノ・タウト(Bruno Taut) 経歴

- 1880年 5月4日ケーニヒスブルグ生まれ
- 1921年 マクデブルグ市の建築技師
- 1924年 ベルリン住宅供給公社「GEHAG」の建築家
- 1930年 ベルリン工科大学住宅と住宅団地計画教授
- 1931年 ロシア国ベルリン芸術アカデミー会員
- 1933年 日本へ移住。高崎の少林山達磨寺洗心亭に住
み「日本美の再発見」、「日本 - タウトの日記」
「日本文化私観」などを著述。
- 1936年 トルコへ(イスタンブール大学教授)
- 1938年 イスタンブールでドイツ市民権を放棄
- 1938年 12月24日死去

ブルーノ・タウトは当初は「ガラスの家(1914年)」、「鉄
のモニュメント(1913年)」を発表し、印象派の建築家とし
て認められる。ドイツが第一次世界大戦で敗戦後、戦勝国
への賠償金支払いのため工業化したベルリンで住宅が欠
乏するや、ベルリン住宅公社の技師となった。そして労働
者のために集合住宅を多数建設。社会主義建築家として
認められる。当時のベルリンの労働者住宅は監獄のよう
に住環境が悪かったが、タウトは写真1のように緑と日

当たりに配慮し、
住棟間隔をあげ住
人の健康に配慮し
た集合住宅を沢山
建設した。それら
には写真2のよう
な顕彰碑が建てら
れている(ベルリ
ン郊外のブリッツ

にある馬蹄形住宅(Hufeisensiedlung)をはじめとするタ
ウト設計のこれらの団地はUNESCO世界遺産登録が決
まっている)。筆者はベルリン出張があるたびに今回はこ
の団地、次回はこの団地と決めて、タウトの作品を写真に
撮り続けてきた。恐らくタウトの建築写真を一番沢山
撮った日本人ではないかと自負している(それがどうし
た!というご意見も有ろうが)。

この間、ロシアなどでも仕事を行なったため、台頭して
きたナチスに睨まれ、あこがれていた日本へ1933年移住
した。この間にシュツットガルト大学留学から帰国した
久米権九郎(株式会社久米設計創業者)の援助を受ける。
当時日本もナチスドイツと組んでいたため、ナチスドイ
ツから逃げ出してきたタウトは希望していた東大教授な
どの公職につくことはできず、高崎の少林山達磨寺の「洗
心亭」に住み(写真3洗心亭の様子)、「日本文化私観(1936
年)」、「日本美の再発見(1939)」などを発表し、桂離宮、伊
勢神宮などを絶賛し、日本文化の世界への紹介を行なっ
た。

しかしタウトはスパイの嫌疑をかけられたのか特高警
察などに付きまといわれ、身の危険を感じていた。そして
1936年イスタンブール大学に教授として招かれたのを機
にトルコへ脱出し、1938年にトルコで生涯を閉じた。



写真3 タウトが1933～1934年まで伴侶のエリカと住み「日本美の再発見」他多くの著述を行った少林山達磨寺洗心亭。(高崎市)



写真4 ベルリンの郊外ドイツ鉄道ダーレビッツの駅舎。タウトもここから電車で勤務先のあるベルリンへ通ったであろう。現在は無人駅となりプラットフォームも雑草が生い茂っている。



写真6 ベルリン市 Trierstr. の集合住宅(ブルーノ・タウト 1925～1926年設計)。赤と青の激しい色彩が施されている。



写真5 タウトの旧宅。現在の所有者の婦人画家と筆者。(ここからも建物の損傷がわかる)



写真7 タウト旧宅の居間。(雰囲気は熱海の日向邸と似る)

ブルーノ・タウト(Bruno Taut)設計の独立住宅について

日本へ来る1933年までに本人が設計し、家族と住んだ家は現在もベルリン郊外のダーレビッツに残っている(写真4 ダーレビッツの駅舎)。ここは旧東独にあたり、現在、女流画家の所有になっている。

筆者は2007年6月中旬にベルリン市の旧市庁舎で開催されたドイツ外断熱協会創立50周年記念大会に招待され、講演を行う機会があった。その大会終了後にこのダーレビッツの旧宅を訪ねた。アポイントもなく訪れたので、最初は留守の様子。呼び鈴を何回押ししても誰も出てこなかった。その後やっとの事でアポイントが取れ、所有者の婦人を訪問し、住宅を案内していただいた。写真5は所有者と筆者である。

その際、建物はブランデンブルグ州により文化財保護指定を受けているが、旧東独に位置する州も年金生活で

ある所有者も資金が無く、住宅の補修が出来る状態ではないという現状を認識した。

タウトはこの旧宅について「ある住宅(Ein Wohnhaus)」という本を著し、氏の住宅観を披露し、詳細な色彩論を展開している。ダーレビッツの住宅を見ると全体に様々な色彩が施され、暖房用の放熱器にまで色彩を施している。タウトは「ベルリンの空は暖房用に燃焼される石炭の油煙で建物が黒く汚れるので、住宅に色彩を施した。」と記している。冬になるとベルリンにはどんよりと重い雲が垂れ込み、永い間どいてはくれない。夏に見ると我々日本人にとっては激しすぎるように見える彩色も、このような時に派手な彩色が映えてくれるのである(写真6 Trierstr.住宅)。

また、タウトの「日本 - タウトの日記(岩波書店、篠田英雄訳)」に、日本で入手した掛け軸をダーレビッツの住宅の何処に掛けようかと悩む記述もある。

タウトは日本での設計活動にも制限があり僅かに1点だけ作品を残している。これが熱海にある日向邸である。ダーレビッツの旧宅の居間は日向邸の居間と雰囲気がそっくりである(写真7 旧宅居間の様子)、また外壁には



写真8 ダーレピッツに残るタウトの旧宅(延べ床面積264㎡、敷地面積2500㎡)。ガラスブロックの使用はタウト初期の作品「ガラスの家」と似る。

ガラスブロックが使用され、これは初期の作品である「ガラスの家」と似ている(写真8 旧宅の外観)。この旧宅にはタウトが自らの設計思想を凝縮させ、独立住宅として実現させたという意味でその存在意義が大変大きい。

また、タウトは来日するや伊勢神宮や桂離宮のような白木の建築を激賞する。特に「桂離宮はアテネのパルテノン神殿と並ぶ世界に誇る建築である」と記述している。しかし当時の日本人は桂離宮の素晴らしさを理解せず荒れていた。外国人建築家に激賞され、あわてて修復が行われたのである。タウトの来日がなかったなら桂離宮は現在存在していなかったかもしれない。タウトは桂離宮をはじめとする日本建築の救世主と言って過言ではない。

このままでは折角の名建築でブルーノ・タウトが帰ることの出来なかったタウト設計の独立住宅が崩壊の危機に晒されている。日本人として、一人の建築家として筆者はそれを時の流れに任せるに忍びない。

印象派から社会主義建築家へ、そして日本の建築文化を掘り起こし国際的に紹介した労働者及びわが国の恩人の一人であるブルーノ・タウトが帰ることの出来なかった旧宅。この旧宅の修理の記録を公表することで、タウトが自らの設計思想を自らの住宅に凝縮させた内容をわが国から世界に情報発信できる。またタウトの遺物から世間に公表されていない著書などを見出す可能性もある。そこで筆者は日本で資金を集め、修理、修復を行ない、またその記録を書籍として広く公表し後世に残したいと考えた。

タウト旧宅の修復保存のために日本で寄付金を募ることはいろいろ困難が伴うであろう。例えば、「これは外国にある建物に対する寄付でないか、建物の所有者に対する寄付でないか」というご意見も多く、寄付金集めを始め

るにも片付けなければならない問題は多い。

筆者は、所属しているお茶の水女子大学を主体とした事業の推進を考えている。また協力者として、国内の特定非営利活動法人や学術交流会、ドイツ側にもパートナーとして工事業者や大学等を見つけ共同作業を進めるなどの計画も行っている。

タウト自邸改修工事業への協力をお願い

筆者は募金をお茶の水女子大学で募集する事を考えている。これは寄付者の立場では寄付金が税優遇され経費で落とせるなど有利になると、支出も国家の監視があるので、安心であるなどの理由による。改修工事についてはドイツの大手建設業者から修理の見積もりを取り、これは約500万円である。しかし新築工事と異なり改修工事には追加工事が発生する事も考えられる。またこの住宅が文化財保護指定を受けている事から、ブランデンブルグ州の州都であるポツダム市建設局の指導の下、従来通りに修復を行わなければならないなどの制約がある。その制約により余計に工事費がかかることが見込まれる。こういった経費も見込み、工事費に1000万円を予定している。

また修復を行なったとしてもその状態で、建物が永遠に保存できるわけではない。そこで今回の修理報告を学生とともに研究し、その研究成果を書籍として出版し、寄付者にお礼に配布する事を考えている。これには単に修理報告だけでなく、筆者が従来行ってきたタウトに関する研究報告も加える予定である。この出版費用に1000万円を予定している。

また修理記録研究と工事現場の監視のため、学生及び筆者らの旅費、滞在費等を含む研究費に1000万円、合計3000万円の寄付を集めたいと希望している。当然これは希望額であって、これだけなければいけないと言う事ではない。基金がこれを下回れば其れに応じた対策を施す所存である。

読者諸氏にもこの問題にどう取り組んだら良いかご意見を賜りたくお願いをするものである。

このことに関するお問い合わせはお茶の水女子大学生活環境研究センター田中辰明(住所:〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1お茶の水女子大学 田中研究室 Tel・Fax: 03-5978-5586, e-mail: tanaka@cc.ocha.ac.jp)宛てまでお願いしたい。